

出版編集のための23冊

「学術出版」の意義・意味を知るヒント

—— 北海道大学出版会主催トークイベント ——

「学術書を書くということ」

スピーカー●橘 宗吾（名古屋大学出版会専務理事・編集部長）

×

「編集を語る」

スピーカー●橘 宗吾（名古屋大学出版会専務理事・編集部長）

コーディネーター●竹中英俊（北海道大学出版会相談役、元 東京大学出版会編集局長）

橘宗吾 セレクト

1

クロード・レヴィ＝ストロース 著／大橋保夫 訳
『野生の思考』
みすず書房、1976年（ISBN：978-4-622-01972-8）

学生時代にいちばん大きな影響を受けた本。野生の思考を特徴づける「ブリコラージュ」こそ、編集の精神だと思っている。

2

渡邊一民 著
『林達夫とその時代』
岩波書店、1988年（ISBN：978-4-00-001861-6）

それまで親しんできた深く深く突き進む（かに装う）精神とは異質の知性がそこにはあった。探究心とともに、知のアマチュアリズムを持ち続けることの大切さ。

3

藤垣裕子 著
『専門知と公共性——科学技術社会論の構築へ向けて』
東京大学出版会、2003年（ISBN：978-4-13-060302-7）

知識や科学について学問的に論じるための新たなスタイルを知った。「ジャーナル共同体」が一つのキーワード。本書で描き出された世界に「学術書」をどのように位置づけるかが、考えるべき課題となった。

4

長谷川 一 著
『出版と知のメディア論——エディターシップの歴史と再生』
みすず書房、2003年（ISBN：978-4-622-07029-4）

出版メディア論の金字塔。長谷川さんのこの本で、現在の基本的な動きはすべて予見されている。「人文書」カテゴリーへの批判にショックを受け、それに応答することが大きな課題となった。

5

佐藤郁哉・芳賀 学・山田真茂留 著
『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』
新曜社、2011年（ISBN：978-4-7885-1221-4）

学術書出版社の営みを社会的に本格分析。大学出版も取り上げられ、そのアイデンティティ問題に答えるものとして大学出版部協会を位置づけている。「編集者＝ゲートキーパー」論を超えることが課題となった。

6

湯浅泰雄 著『和辻哲郎——近代日本哲学の運命』
ミネルヴァ書房、1981年
ちくま学芸文庫、1995年（ISBN：978-4-480-08196-8）

師匠の後藤郁夫さんが前任地で編集した本。「あとがき」でこんなふうにかかれる編集者になりたいと、ずっと思っていた。

7

古矢 旬 著
『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』
東京大学出版会、2002年（ISBN：978-4-13-036210-8）

大先輩の竹中英俊さん（現・北海道大学出版会相談役）が編集された本。著者は当時北大におられた古矢先生。私にとって学術書の理想でありつつ、それを超えたいと思ってきた。

8

明星聖子 著
『カフからしくないカフカ』
慶應義塾大学出版会、2014年（ISBN：978-4-7664-2150-7）

『学術書の編集者』を書かせてくれた上村和馬さんが担当した本。学術書のもう一つの理想。こんな本をつくりたいと、いつも思っているが、なかなかできない。

竹中英俊 セレクト

■学術書について

1

橘 宗吾 著

『学術書の編集者』

慶應義塾大学出版会、2016年（ISBN：978-4-7664-2352-5）

日本の学術出版をリードする著者が考えてきたことを開陳した類書なき著作

2

鈴木哲也・高瀬桃子 著

『学術書を書く』

京都大学学術出版会、2015年（ISBN：978-4-87698-884-6）

学術書を公刊する際の書き手の心構えを編集者の立場から説いた有用な著作

■本の現在と歴史について

3

佐藤郁哉・芳賀 学・山田真茂留 著

『本を生みだす力——学術出版の組織アイデンティティ』

新曜社、2011年（ISBN：978-4-7885-1221-4）

学術出版を担う出版社（東大出版会、有斐閣、新曜社他）の現状とその役割

4

鹿島 茂 著

『神田神保町書肆街考——世界遺産的“本の街”の誕生から現在まで』

筑摩書房、2017年（ISBN：978-4-480-81532-3）

日本の広義の出版・教育史に重なる、世界に冠たる書肆街の形成過程と現在

■言葉に向き合う所作について

5

世阿弥 著

『風姿花伝』

岩波文庫ほか出版社多数あり

自らをただ編集・出版・著作論としても読むことのできる傑出した芸道論

6

松尾芭蕉 著
『《新潮古典文学集成》 芭蕉文集』
新潮社、1978年（ISBN：978-4-10-620317-6）

著者・出版者に対し孤立の自覚とそれにたえる力を与える言葉の芸術の高峰

7

本居宣長 著
『玉勝間』
岩波文庫ほか出版社多数あり

代表的な国学者による文字や言葉や本について示唆するところの多い玉手箱

8

福澤諭吉 著
『福翁自伝』
岩波文庫ほか出版社多数あり

日本近代について考える際に欠かせない、著者・出版者の優れた口語の自伝

■日本語とその根拠について

9

白川 静 著
『漢字——生い立ちとその背景』
岩波新書、1978年（ISBN：978-4-00-412095-7）

漢字学泰斗による、日本語表現の根拠の重要な一つである漢字の世界を開陳

10

石川九楊 著
『二重言語国家・日本』
中公文庫、2011年（ISBN：978-4-12-205579-7）

書家書道史家が言語に視座を据えて、日本とは何か、日本語とは何かを考察

11

野間秀樹 著
『ハングルの誕生——音から文字を創る』
平凡社新書、2010年（ISBN：978-4-582-85523-4）

ハングルの例に即して、言葉とは何か、人間とは何かに肉薄する優れた作品

12

折口信夫 著
『死者の書・身毒丸』
中公文庫、1999年（ISBN：978-4-12-203442-6）

わたしたちの存在の根拠に降りていく、日本語が達成した言語芸術の最高峰

■北海道とそこから発信することについて

13

本庄陸男 著『石狩川』
新日本出版社、2011年（ISBN：978-4-406-05478-2）
ほか出版社多数あり

明治初年の開拓を描いた、北海道の『夜明け前』（島崎藤村）と言われる作品

14

北海道の出版文化史編集委員会 編
『北海道の出版文化史——幕末から昭和まで』
北海道出版企画センター、2008年（ISBN：978-4-8328-0811-9）

その出版活動は、そのまま当地の人々の歴史であると実感させる比類ない本

15

浅田英祺 著
『流水の科学者 岡崎文吉』
北海道大学出版会、1994年（ISBN：978-4-8329-9541-3）

編集思想に示唆多い「自然主義」を謳った「石狩川の父」岡崎を描いた著作

memo



北海道大学出版会

「学術書を書くということ」2017年11月24日 北海道大学附属図書館
「編集を語る」2017年11月25日 紀伊國屋書店札幌本店
作成／北海道大学出版会